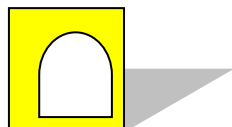


日吉台地下壕保存の会会報



第128号

日吉台地下壕保存の会

次世代に伝えよう 地域の戦争遺跡

第24回 川崎・横浜平和のための戦争展報告

副会長 亀岡敦子

はじめに

秋晴れの10月22日、23日の2日間、第24回川崎・横浜平和のための戦争展が、川崎市中原区にある川崎市平和館で開かれました。今年のテーマは「次世代に伝えよう 地域の戦争遺跡!」としました。実行委員会の構成団体である、日吉台地下壕保存の会/登戸研究所保存の会/川崎中原の空襲・戦災を記録する会/みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会は、それぞれ戦争遺跡や戦争の記憶を次世代に伝えるために活動していますが、年に一度のこの催しは、互いの活動を具体的に知るとともに、今まで戦跡について知らなかったという来場者との、交流の場でもあります。今回は新聞の予告記事のおかげで、初めての方々が大勢来てくれました。

(1)展示

各団体は、地域で展示を行っています、それらを一堂に集めたものです。パネルに写真・図表・年表などが分かりやすく展示されています。まず多摩区に残る登戸研究所、次に地元中原区の詳細な空襲の記録、続いて宮前区の東部62部隊の展示があります。これらは来館者にとっても身近な戦争遺跡で、うなずきながら丁寧にみる人も多くいました。その次は異色の展示、多くの市民から寄せられた戦争絵画で、空襲の記憶や学童疎開など、不思議な迫力が伝わります。最後は日吉台地下壕の展示で、ここも関心が高く、熱心に見て質問する方が多くいました。今回初めて、展示のみの22日に各団体がミニレクチャーの時間を設定しました。好評のようでしたから、さらに工夫を重ねて充実させたいものです。

(2)若者の発表

この催しでは、最初から「若者に伝える」とことと同時に「若者が伝える」ことを、重要な柱としてきました。今年は2人の若手研究者の、実践報告です。まず遠山耕平氏(法政大学第二中・高等学校教諭)から部活動顧問として、高校生と一緒に登戸研究所資料館を見学し、二人の勤務者からの聞き取りをした報告がありました。勤務者はともに当時15~17歳で、まさに高校生にとっては、わ

目次

巻頭言：次世代に伝えよう 地域の戦争遺跡! 報告	p 1
報告：第24回平和のための戦争展シンポへの報告	p 3-4
報告：川崎・横浜平和のための戦争展展示に解説	p 5
報告：港北区図書館パネル展&講演会の感想	p 6
報告：日吉フェスタ・ミニツアーをガイドして	p 7
報告：東京新聞「戦跡を訪ねて」	p 7
連載：日吉第一校舎ノート (10)	
『君たちはどう生きるのか』の時代	p 8-9
連載：駆逐艦「雪風」乗組・元特別年少兵西崎信夫さんの	
お話 (下)	p 9-12
連載：地下壕設備アレコレ (17)	
通信・電源設備の新資料を見つけました	p 13-14
お知らせ：第11期日吉の戦争遺跡ガイド養成講座	p 14
チョットひと休み：最近見た珍百景・その2	p 15
訃報：	p 15
活動の記録 (9~12月)：	p 15-16

が身に引き寄せて考える貴重な経験であったことでしょう。次に都倉武之氏(慶應義塾福澤研究センター准教授)による、「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトから見えてきたことの報告がありました。卒業生や戦没者遺族から提供された写真や資料をパワーポイントで見ながらの話は、大変興味深く説得力がありました。

両報告に共通するのは、身近なところから戦争をみようとしている点です。高校生と大学生のその年齢にこだわり、自校に起こった出来事にこだわって研究を進めている視点と行動は、《次世代への継承》の要のように思えました。



「次世代に伝えよう 地域の戦争遺跡！」シンポジウム

(3)シンポジウム

最初に、山田朗氏(明治大学平和教育登戸研究所所長)による講演があり、登戸研究所資料館を例に、戦跡を次世代に伝えることの意義と問題点を明らかにしました。それを受けて、各団体からの実践報告と活発な意見交換がなされました。発足10年目の「登戸研究所保存の会」は、地元の催しへの参加や絵本の出版と小学生対象の朗読劇など、様々な工夫をしています。29年目を迎える「日吉台地下壕保存の会」は、聞き取りや書籍刊行のほかに小学生から戦争体験者までの幅広い年齢の見学者への案内を積極的に行っていますが、中でも小中学生の案内の難しさについて報告がありました。「川崎中原の空襲・戦災を記録する会」は7年前に中原空襲と戦災を記録する目的で発足しましたが、展示会や親子対象の講演会などを行っています。「みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会」は、昨年会を結成し、見学案内や聞き取り調査など、会として行うようになり活動が活発になりました。



「大学は戦争の何を引き継ぐのか」を発表する
戸倉武之 慶應義塾大学准教授

(4)おわりに

2015年は戦後70年目の節目の年ということで、ジャーナリズムはかつてないほどの戦争関連報道が花盛りでした。しかし一年経った今年、役目は終わったかのように報道量が激減しています。しかし、私たち戦争遺跡保存に関わり、戦争の愚かしさと悲惨さを次世代に伝えようと努めている者には何年目も同じことです。いつでもそれぞれの生活の場から、自分の出来ることを地道に続けるほかないのだと確信した、今年の戦争展でした。最後に、会員の皆さまに心から感謝申し上げます。賛助金をお寄せくださった方々や、会場にお運びくださった方々のおかげで、成功裡に終えることが出来ました。

報告**第24回平和のための戦争展のシンポジウムへの報告(骨子)
一次世代に伝えよう地域の戦争遺跡一**

日吉台地下壕保存の会 茂呂秀宏

1. 小学生の地下壕案内から見えてきたこと**(1) 2015年度の小学生の案内の実践****① 案内した学校数・人数**

2015年 小学校4校 366人 中学2校 50人 その他個人として50人
高校5校 323人(うち約80%が慶應高校)・・・総計789人

2016年 小学校2校 187人 中学1校 140人

(10/3まで) 高校2校 98人 小中高 47人(うち中学30人)・・・総計472人

② 見学の目的 ・六年生の社会科アジア太平洋戦争の授業の予習・復習として
・地域学習として**③ 実施時間**

通常授業時間中での見学 ※他に夏休み中の見学もあり

④ 案内の骨子

i 見学場所 70年以上前のアジア太平洋戦争末期に使われていた連合艦隊司令部地下壕跡など。

ii 「70年前」は決して遠い古い歴史の話ではない。

a 学区や周辺の地域には戦争の記憶をとどめる遺跡が残っている場合がある。空襲に見舞われた地域も多い。

b 現在、80歳以上の祖父母、曾祖父母がいる人は、戦争の経験を直接聞ける。

また、直接戦争体験をしていない親や祖父母からも、戦争体験のある人から話を聞いている場合には、直接経験にもとづいた戦争の話を聞くことができる。

iii 地下壕の歴史的位置づけ

a アジア諸国に多大な犠牲を強いた日本がアジア諸国を支配しようとした戦争遺跡

b 本土決戦を想定しつつ、敗北があきらかになっても日本国家存亡の危機が迫るまで継続させられ、日本国民に多大な犠牲を強いた戦争のための戦争遺跡

iv 結語

a 平和な戦後社会を尊重し、戦争を再び起こさずそれを保持できる主体の育成

b 国家的対立を含めた政治問題の解決手段として、他国を支配するための戦争に同意せず従わない主体の育成

(2) 案内の説明の変化

i 近年は上記iiの強調により、戦争がより身近なことであったことを説明している。

ii 戦争のとらえ方として、アジア諸国との関係からのとらえ方と、ならびに、国家と国民の関係からのとらえ方からの説明を重視している。



日吉台地下壕保存の会 茂呂秀宏さんによる発表

iii 上記の変化をもたらした理由

(きっかけ)

- ・豊田市の下山中学校の修学旅行の見学会での経験
日吉から出撃命令が出された神風特攻隊について、特攻隊を戦争の非人間性を象徴するものとして取り上げた案内に対して、「若い特攻隊員が国家のために命を捧げていったことに感動した」との感想文が出てきたこと。
- ・日吉台小学校の10年近く続いたフェスティバルの実践の途絶。
- ・平和教育に「のらなくなってきた」子供たちが増加傾向にある。

(このような状況が出てくる背景・原因)

- ・戦後70年たち、戦争を直接経験した人が減少し、現実感覚が希薄となってきた。
- ・阪神大震災→9・11→3・11(自衛隊の救助活動)→安保法制化・自衛隊海外派兵の論議の活発化などの情勢が子供たちの意識に与えた変化・・・人や社会や国のためになにかやりたいという気持ちの醸成に(含む災害時のボランティア活動の活性化定着化など)、今まで私たちがやってきた平和教育が対応できなくなってきた。詳細は口述

(案内説明の変化にこめた意味)

- ・より内在化した戦争体験の集積と提示 内容は口述
- ・アジア太平洋戦争が、侵略戦争であったととらえることは正しいが、国内的には本土決戦という狂信的建前によって、負けることが分かっていたにもかかわらず継続され国内の国民にも報われない多大な犠牲を強いた戦争でもあったことをしっかり押さえていくとともに、そのような国家が国民の同意をつくりだすことによって(たとえば「満洲は日本の生命線」などというスローガンの普及)成り立っていたこともおさえ、当時の日本国家と国民の関係をあきらかにする。前述したように下山中の生徒の特攻隊に対する感想もこのような戦争総括が提示されれば、相当異なったものとなる。

2. 今後の課題

- ・あらためて、アジア太平洋戦争とは何であったのか深めていく必要がある。
- ・その時もっとも大事な課題は、この戦争がなぜ負けるのが分かっていたにも続けられたのかという観点から、具体的に戦史の洗い直しをするとともに、その中から国家と国民の関係についてより正しい認識を持たせること。

例示としての藤原銀次郎(藤原工大の設立者 東条内閣軍需相 企業利潤が生まれないと兵器の生産ができない戦時経済体制の改変を行おうとしたが失敗、企業利潤が生まれている限り戦争は継続される体制が継続する。)詳しくは口述

- ・アジア太平洋戦争を明治以来の日本近代史の中で改めて位置づけなおす。詳しくは口述
- ・最後に、上記の状況が決して過去のことではなく、現代の日本の現実に通ずることが多々あるということを認識するとともに、過去のような歴史選択をしない次世代の主体をどうしたら育成できるのかを考えていきたい。



平和館展示 絵画「市民が描いた戦争の記憶」

報告

川崎・横浜平和のための戦争展 展示ミニ解説

運営委員 佐藤 宗達

22日は午後1時～3時展示ミニ解説、1時には3名来られたので当会の展示をご案内した。日吉地区の空襲被害図では日吉から中原にかけての赤色の空襲被害の様子を見てもらい、最後はたまたま近くに空襲記録のDVD放映設備が置いてあるのでこちらにもご案内した。米兵の証言も採録されており貴重な映像でした。また隣には戦争絵画が並んでいるのでそれを見ながら次の展示へ廻ってもらいました。絵の中には当会副会長・長谷川崇氏の作品「陸軍東部 62 部隊兵舎を校舎として使用した思い出」があり、地図と思い出が綴られておりました。

見学者はほぼ途絶えることなく来られ、熱心にご覧になっている方にお声をかけて説明しました。わざわざ見学に来られる方々なのでそれなりの理由があり「親父が長門に乗っていた、大佐だった」という方には連合艦隊のパネル、特に旗艦の説明をしました。

「母親は樺太からの引き揚げ」という方からは帰還の様子を聞いてこちらが教えてもらいました。4時半まで多くの方に見ただけで幸いでした。



陸軍東部62部隊兵舎を校舎として使用した思い出

1945(昭和20)年4月15日京浜地区大空襲のため、川崎にいた中学1年生の私は、家・学校・市街地が焼け野原となり、その後の授業は市内の小学校(向小学校・坂本小学校)等を間借りして続けられました。

1947(昭和22)年、川崎市馬場にある62部隊兵舎を校舎とすることになり、南武線溝の口駅より徒歩30～40分の砂利道を通学しました。当時履物は殆ど下駄または高下駄で、砂利道のため2～3ヶ月で交換する有様でした。また、車が通ると砂塵で前が見えなくなるほどでした。

初めはバス停より分かれて一番奥の兵舎①②を使用しましたが、部屋の板を剥がしたら小さな虫がいっぱい出てきて衛生上悪いということで、入口に近い③～⑤の兵舎に移りました。まず右側の平屋を職員室に使い、二階建ての兵舎3棟を校舎にしました。各室には大きなテーブルがあり(汚れていた)、木の長椅子を4人掛けで使用しました。その時、窓を見たらガラス窓ではなく竹の網に糊紙が張られていてびびりました。ある時鉛筆で突ついたら穴が開き、雨風の強い時は吹き込んできました。

左側の倉庫には銃剣術用の防具が山ほど積まれていて、後で布の部分を取り取り丸めて野球のボールを作り、毎日早弁で昼休みを楽しんだものでした。

また、校舎より遠方の畑の奥からバスが見えて、時々走ってバス停に行き利用したことがありました。

その後、私たちは平間にある県立川崎工業高校(現在の川崎工科)と合併になり、1951(昭和26)年卒業となりました。

長谷川 崇

陸軍東部 62 部隊兵舎を校舎
として使用した思い出
(長谷川崇氏の作品)

報告

港北区図書館パネル展示会&講演会の感想

運営委員 小山信雄

8月7日、今回で3回目のパネル展示会&講演会を行いました。今回は中高生向け特別授業という初めての企画でしたが、中学2年生を中心に先生、父兄の方も含め18名の参加となりました。実際に空襲を体験した長谷川崇副会長からの体験談もあり、みなさんとても熱心に話を聞いてもらいました。アンケートも全員から頂け、感想ご意見も多数頂きましたので、その中から2件の内容について以下ご紹介させていただきます。

◎高校1年生 K. Iさん(男性)

僕は「日吉台地下壕を知っていますか」に参加して学べたことが2つあります。1つ目は、アジア太平洋戦争の大まかな流れです。これまでは、主な戦いなどしか知りませんでしたが、参加したことで、それらがどのように進んでいったかを知ることができました。2つ目は、日吉がどのようにして戦争とかかわっていったのかなど、日吉キャンパスができてからの日吉の歴史です。地下壕を作るときに、住民が立ち退かなくてはいけなかったり、畑が使い物にならなくなったり、建設に朝鮮人労働者が使われたりしたことなどを聞いて、戦争をすると多くのものが失われてしまうことを実感しました。また、実際に空襲を体験された方の話を聞くことができたり、1階でのパネル展で当時の写真が見れたりしたことは、大変勉強になりました。これからも、戦争にかかわる行事に参加して、戦争のことを学びたいと思います。保存会の皆さん、このような行事に参加させていただき、本当にありがとうございました。

◎小学6年生 R. Iさん(女性)

日吉台地下壕見学会で私が学んだことは3つあります。1つ目は、慶應義塾大学と海軍連合艦隊の関係についてのことです。慶應義塾大学に古くからの校舎があり、連合艦隊が使用していたというのは今まで知りませんでした。2つ目は、地下壕内においてあった土嚢についてのことです。地下からしみ出た水を土嚢で止めてあるということを学びました。3つ目は、連合艦隊が日吉を選んだ理由と、地下壕を造った理由です。通信状態が良かったからという理由や、空襲から身を守るために地下壕を造ったなどという理由の上で日吉にあり地下壕を造ったということを学びました。今回参加させて頂いた見学会では、今まであまり知らなかった戦争のいろいろなことを知ることができました。また、とても分かりやすい保存の会の方のお話と、詳しい資料で、地下壕のことを深く知ることができました。そして、だんだんと減っていつている戦争体験者の方々のお話を受け継ぐために、戦争のことをもっと知りたいと思いました。見学会を通して戦争のことについて興味を持つきっかけを作ってくれた日吉台地下壕保存の会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



講演会の様子(港北区図書館会議室にて)

報告

日吉フェスタ ミニツアーをガイドして

運営委員 佐藤 宗達

11月5日は天候に恵まれ来客が多く、当会のテントを覗く人も多くキャンパスミニツアーも1時スタート(佐藤がガイド、他に3名補助)2時スタート(小山氏がガイド、他に2名補助)各々約20名の参加があつた。福沢諭吉胸像からガイドを開始、機会があれば三田・図書館脇の胸像もご覧くださいと言。坂を登り藤山記念館へ。藤山雷太よりもご子息の藤山愛一郎の方が馴染みがあるので愛一郎についてお話をした。

第一校舎と第二校舎の間に立つて左右対称を見てもらう。その後モニュメント、レリーフの説明、南側の出入口前の待避壕を見てから蝸谷に降り、地下壕出入口前で地下壕の説明、補助で堤さんが来てくれたので、戦時中人事局の地下壕に避難したなどの体験談をお話してもらう。チャ



キャンパスミニツアー(福沢諭吉像前でのオリエンテーション)

ペルから堅抗上部、寄宿舎前でまとめをしたら丁度1時間でした。折角だから人事局地下壕の出入口も見ませんかとお声かけたら半数以上の方が来られた。ボート練習用水漕を見ながら理工坂を降り、新築された水溜めの上に覗いてる人事局地下壕出入口を確認してもらった。

この理工坂の往復が意外ときつく、高年令者には迷惑ではなかったかなと一寸気になりましたが参加者の皆様に喜んでいただけたようで幸いでした。次回はもう少し上手にと反省。

東京新聞に掲載された「戦跡を訪ねて」シリーズに日吉台地下壕が紹介されました。

- ① 8月20日
③ 8月23日

(東京新聞掲載記事)

発言

戦跡を訪ねて③

(八王子市 関さん)

みなさんから寄せられたテーマ投稿「戦跡を訪ねて」の三回目を掲載します。

(四回目は二十五日です)

戦跡ガイド 岸本 正 63

地下壕から平和考えて

昭和に入り、非合理的な戦争となつたかを痛感して取り戻さねばならぬと考へてい

見学者は、薄暗く湿った地下壕の空間にじかに触れ、肌でそのことを感じていた。特に感受性の鋭い若い世代にはより多く体験してもらいたく、ガイドボランティア内では当惑を覚える人びとの体験談を聞くなどの研修に励み、チームで効果的に案内できるように努めています。

戦前に同壕を通るような時代だからこそ、戦争遺跡を通して平和を考える「プラスの遺産」としての活用を願っています。

(東京新聞掲載記事)

発言

戦跡を訪ねて①

(小山市 P.T.A)

戦争体験者が年々減り続ける中、戦跡の重要性が高まっています。テーマ投稿「戦跡を訪ねて」を四回にわたり掲載します。

主編 藤原佳子 65

決戦準備に背中そくっ

南方の戦線大敗の戦後の混乱にも悩まされた。さらに本土決戦に備えてさまざまな武器が設計・製造されたが、その一部は国民を啓蒙するためというより、女性・老人・子どもを含む「後援特攻」のための武器である。本土決戦は回避されたが、沖縄ではそれに近いことが実際に起った。戦い防衛隊での話を聞いた。背中そくっとしたのを覚えている。

こうした歴史を現場で学ぶことは、ただ話を聞くよりもはるかに臨場感があり、その重みが迫ってくる。多くの人たちに見学してほしい。

連載

日吉第一校舎ノート（10）

『君たちはどう生きるか』の時代

会長 阿久沢 武史

吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』の冒頭は、主人公の少年「コペル君」が銀座のデパートの屋上から東京の街を眺めるシーンで始まる。7階建のビルディングから見下ろす銀座通りには、アスファルトの路上を自動車が川の流れるように走り、その間を路面電車がゆっくりと進む。大都市東京は、まるで一面の海のような。朝になるとたくさんの人々が集まり、夕方になると一斉に引き上げていく。朝と夕のラッシュアワーで混雑する電車やバス、それぞれの思いを胸に秘めながら潮の満ち引きのように移動する何十万もの人々。「人間て、まあ、水の分子みたいなものだねえ。」（岩波文庫版より引用、以下同）——コペル君は大都市に生きる人間の姿に思いを馳せながら、おじさんと一緒にニュース映画を観て、タクシーで山の手の家に戻っていく。

ここには1930年代の近代都市「東京」の一断面が描かれている。『君たちはどう生きるか』は、昭和10年（1935）から刊行された『日本少国民文庫』全16巻の最後の配本として、昭和12年（1937）7月に出版された。大正12年（1923）9月1日の関東大震災で東京が壊滅的な打撃を受けてから14年、銀座には鉄筋コンクリートのビルが立ち並び、デパート・自動車・ラッシュアワー・映画など、現代に通じる「モダン都市東京」の原風景がそこにある。日吉に新しいキャンパスが開設され、第一校舎で予科の授業が初めて行われたのは昭和9年（1934）5月1日であった。1930年代の日本は、そして慶應義塾は、どのような空気の中にあったのだろうか。

1920年代から30年代、大正から昭和初期にかけてのこの時代は、一般に「モダニズムの時代」と呼ばれる。第一次世界大戦後の国際協調と束の間の平和の中で、都市生活の近代化・大衆化が進んでいった。映画館、地下鉄、デパート、ラジオ放送、カフェ、キャバレー、ダンスホール、流行のファッション。アメリカでは「ジャズ・エイジ」と呼ばれた時代であり、日本では「モボ・モガ」と呼ばれる人々が街を闊歩した時代である。映画やラジオ、新聞・雑誌などのマスメディアの発達によって、日本人はかつてないほど「世界」を身近に感じていた。東京は、パリやロンドン、ニューヨークや上海などの各都市と同時進行的につながり、最先端の文化や流行が街を彩るようになる。

コペル君は15歳、父親を2年前に亡くしたが、中学に通い、比較的恵まれた環境の中で明るく素直に成長している。母親の弟である「おじさん」が、義理の兄の遺志を継いで甥に人間として立派な男になってほしいと願い、この少年に正面から向き合い、助言する。物語はコペル君が友人との関係の中で味わう喜びや苦しみを中心に進み、おじさんが書き記す助言のノートを途中にはさむことで、コペル君の精神的な成長をたどる構成になっている。コペル君が銀座のデパートの屋上で感じた「人間は水の分子のようだ」という思いは、やがて「人間分子の関係、網目の法則」という「発見」につながる。自分の手元にある「モノ」

（商品）は、原材料を作る人、仕入れる人、製造する人、運ぶ人、売る人、買う人など、見ず知らずの他人同士が網の目のように緊密につながることによってここに存在している。原料を海外から輸入し、商品を海外へ輸出するならば、この関係はさらに世界に広がっていく。「人間同志の世界的なつながり」を土台にして、人はこの社会を生きていく。誰一人としてこの関係から抜け出すことはできない。1937年の東京の空の下に生きる中学生は、「世界」をこのような広がり関係性の中でとらえた。しかしながらおじさんは注意深く、次のように論ずる。

人間は、人間同志、地球を包んでしまうような網目をつくりあげたとはいえ、そのつながりは、まだまだ本当に人間らしい関係になっているとはいえない。だから、これほど人類が進歩しながら、人間同志の争いが、いまだに絶えないんだ。（中略）君が発見した「人間分子の関係」は、この言葉のあらわしているように、まだ物質の分子と分子の関係のようなもので、人間らしい人間関係にはなっていない。

ここにはやはり1930年代という「時代」の現実がはっきりと示されている。そしてそれは「いま」を生きる我々の抱える現実と根本的に何一つ変わりはない。

物語の後半で、おじさんはガンダーラの仏像の話をする。アレクサンダー大王の東征によって、多くのギリシャ人が遠く本国を離れて中央アジアに移り住んだ。インドで生まれた仏教は、ガンダーラの地でギリシャ人の手によって西洋と東洋が融合した仏像になった。それがチベットの天険を越え、中国・朝鮮、そして日本へと伝わっていく。

ギリシャから東洋の東の端までの遠い遠い距離——二千年の時の流れ——生まれては死んでいった何十億の人々——

そして、さまざまな民族を通して、とりどりに生まれて来た、美しい文化！

コペル君は、「学問や芸術に国境はない」という思いと、人間が時間と国境を越えて網の目のようにつながってきたはるかな歴史の流れを想像し、胸をふくらませる。

1920年代の日本は、第一次大戦中の好景気によって経済的に豊かになった反面、一転して深刻な世界規模の経済危機に見舞われた。その結果、持つ者と持たざる者との格差、都市と農村との格差が急激に拡大した。そうした社会の現実、コペル君の周囲からも窺い知ることができる。やがて政治に軍部が介入し、「モダニズムの時代」は「戦争とファシズムの時代」に向かうことになる。

コペル君が銀座のデパートの屋上から東京を眺めた日、東京は「灰色の空」から降る霧雨に濡れて、茫々と広がっていた。それは「暗い、寂しい、果もない眺め」であった。丸山真男が指摘するように、これは盧溝橋事件によって日本が中国との泥沼のような戦争に入り込む昭和12年(1937)という年と無関係ではないだろう(『君たちはどう生きるか』をめぐる回想 上記岩波文庫所収)。しかし、そうした時代の空気の中で、おじさんはコペル君に希望を与え、コペル君もまっすぐに生きたいと願う。「僕は、すべての人がおたがいによい友だちであるような、そういう世の中が来なければいけないと思います。」と自らのノートに書き記した15歳の中学生は、4年後の昭和16年(1941)には19歳で太平洋戦争の開戦を迎えることになる。物語の時間はもちろんそこには進まないが、世界人類の共存を願った少年がどのような青春を送ったのか、コペル君の「その後」を想像すると胸が痛む。

日吉キャンパスが開校した昭和9年(1934)は、この物語よりほんの少しだけ前の時間の中にあった。この時代の日本は、そして慶應義塾は、どのような空気の中にあったのだろうか。第一校舎の「記憶」を辿るにあたって、もう一度設計者網戸武夫がこの建物に重ねた思いを検証していきたい。

※本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号(2015年)に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート(二)クラシックとモダン」の再録となります。

連載

2016.4.9. ガイド養成講座第4回での講演(要旨再録)

駆逐艦「雪風」乗組・元特別年少兵西崎信夫さんのお話(下)

文責 山田 譲

④「生きて帰れない」と覚悟した沖縄水上特攻、左足に貫通銃創

沖縄水上特攻は、「大和」他、巡洋艦「矢矧」(やはぎ)、駆逐艦8隻の10隻で編成され、昭和20年4月5日徳山沖に集結し出撃準備をおこなった。2日前に命令が出て「片道燃料」「護衛機なし」と言われました。潜水艦は飛行機で見つけて爆雷で攻撃する。潜水艦を攻撃する爆雷は左右50mしか飛ばない。その爆雷も「敵艦に撃ち込んで玉砕する」と艦長に言われた。それで、もうこれはダメだ、生きて帰れないとおもいゾッとしました。翌日艦内放送で「最後の郵便物を出せ」と言われました。遺書を書けということです。自分は迷いましたが、書かずに出撃しました。兵長に進級していたので巡洋艦「矢矧」に公用で行きました。そこで司令(古村第二水雷戦隊司令)が訓示をして予備士官(学徒兵)を退艦させまし



沈没後、大爆発をおこした戦艦大和と、護衛の駆逐艦

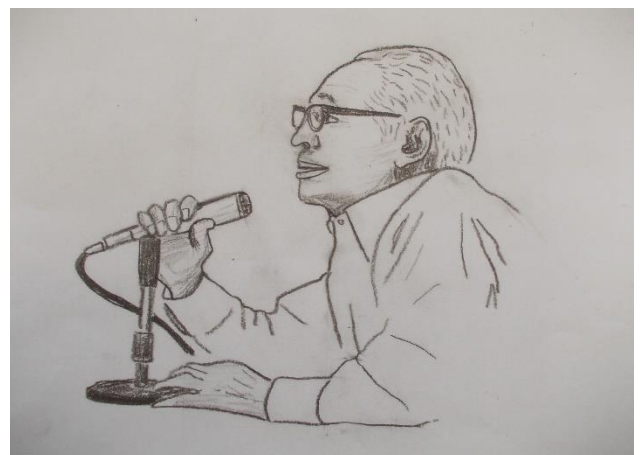
一刻と刻んで(削りとって)いくように聞こえました。たまらなくて甲板に上がって、一番親しかった同年兵の戦友に会って言われたのが「これで内地も見納めだな、今度会うのは靖国神社か、オレたち18才で酒もタバコも女も知らずにオダブツかよ」。返答に困って、もし万一助かったらという気持ちもあったので、「たすかったら4月8日はお釈迦様の誕生日だ」と逃げたら「あしたは家族のために戦おう」と言われて、お国のためでなく家族のためという自分と同じ考えだとわかって感動して、それで覚悟が決まりました。

3時20分に「大和」にZ旗があがり、各艦が銅鑼(ドラ)をボンボンボンと3回鳴らしてガラガラと錨を上げると巡洋艦「矢矧」を先頭に駆逐艦8隻が続き、最後尾に戦艦「大和」がつき、徳山沖を沖縄に向かって出撃しました。豊後水道を出ると敵の潜水艦が2隻いて、こんな近くまで来ているということは内地もよほど危ないと感じました。翌7日昼ごろ、敵の偵察機2機が発見され艦隊はただちに「戦闘開始」となった。進軍ラッパがなり、鉄カブトをかぶって魚雷発射管の戦闘配置につきました。水平線上に真黒な飛行機群が見えてこれはダメだと思った。7回の攻撃があり3回目と5回目がひどかった。3回目の時、左太ももに貫通銃創をうけました。後方から来た爆撃機のものすごい衝撃波が来て上官の内田兵長がウッと言って私の前に倒れた。ちょうどそのとき、自分も足に焼け火箸を3本さされた感じでした。左足がなくなるとおもいました。内田兵長は銃弾で胸をやられてアバラ骨の白いのが見えて、至近弾で船がゆすりあげられると内田兵長の傷が広がる。運ばれていったが亡くなりました。弾薬は兵士が手で運ぶ。砲身が焼けているので海水をかける。空薬莖のかたづけをしていると次の攻撃がくる。

部下に助けられて医務室に行くと負傷兵が18人位いました。デッキのリノリウムが血でベッタリになっていました。死ぬのは自分の部署でとおもい、戻りやすい入口の所にいざりながらいきました。看護兵が来てくれて、ピンセットでガーゼを傷口につっこんで荒療治をしました。傷の入口は小さいが出口が4倍位大きい。入口に弾片が4個あった。「ぬいてほしい」と言ったが「自分でぬけ」と言って行ってしまった。ピンセット、鉗子、ガーゼをおいてい

た。「持てる能力で日本の復興に尽くしてほしい」と言って、10人ほどランチで下船させた。みんな涙でボロボロでした。乗組員は「あとを頼んだぞ、日本を頼んだぞ」と言ってました。それを見て感動して、こういう司令官の下なら死んでもいいと思いました。

今回は帰れないとおもったので、いつもと違って胸がザワザワして気が落ち着かない。荷物も私物を整理して、メモ帳1冊を残して海に捨てました。6日午後3時20分出撃と放送があつて、部屋で瞑想しました。母親のこと、好きだった女の子のこと、父は10年前に死んでいたのもその死に顔や友達の顔がうかびました。父の形見の腕時計がかすかにカチカチというのが、自分の命を刻



講演する西崎信夫さん

ったので、とにかく抜かないと思ひ、痛くてつかめないが深呼吸を4～5回やって、次に息をとめて鉗子で弾片をはさんで一気にぬいた。残りの3個は今もそのままです。戦争の記憶を忘れない証じゃないかと思いますが、それも原因で左足を悪くしています。

⑤横転した戦艦「大和」の最後

自分のポジションにもどったら「後部の機関銃射手が戦死したからそこに行け」と言われました。そこは防備が何もない所でした。そのあと30分くらい見張りの交代で艦橋にも行き敵機の見張りでしたが、やはり「大和」を心配と期待で見っていました。アメリカの攻撃は合理的で、はじめは爆弾で、それから魚雷攻撃。「雪風」のマストすれすれに急降下してきた雷撃機は、海面すれすれに飛び、約1000m付近で魚雷を投下し反転する。魚雷の排気口から出す泡が白い航跡となって「大和」にまっすぐに伸びていくのがはっきり見えました。魚雷攻撃で致命傷を受けた「大和」は左舷に40度傾いた時、艦長の退艦命令が出たのか、乗組員が一斉に海上へ飛び込むのがかすかに見えた。不思議なことに「大和」には泳げない人が多かった。「大和」は横転してお椀をふせた形になって、泳げない人がよじのぼって救助信号を送っていました。駆逐艦3隻で救助にあたりましたが、爆発と大渦の危険で500mより近づけない。無残なことに見殺しになってしまいました。

先輩のうわさ話では「戦艦『大和』は大和ホテルだ。戦闘能力がない。」と言われていました。「大和」には2回乗ったことがあります。入湯上陸（休暇のことを海軍用語で「上陸」と言う。この場合は入浴のための休暇）で「大和」の風呂に入りました。中の設備はすごく近代的で艦橋までエレベーターが2基つき、船内は完全冷暖房でした。大型洗濯機、冷蔵庫が完備され、アイスクリームや、ようかん、菓子も安く売っていました。艦内は十層で複雑で迷路でしたから、なかなか甲板に出られなかった（避難遅れで多くの死者が出た模様）。口径46cmの主砲は42km（東京一八王子）まで砲弾が飛ぶのに艦砲射撃はなく、私が主砲の音を聞いたのはマリアナ沖海戦の時、一回のみ聞いたただけでした。飛行機の編隊に向かって三式弾（榴散弾）を撃ったのを見ました。2～3機ひっかかって墜落しました。その一度だけです。高射砲と機銃で応戦していた。惰性が強く舵がきかないため格好の攻撃目標になった。それを3隻もつくった。3隻目の「信濃」は途中から飛行甲板をつけて航空母艦として使う予定が、横須賀方面への空襲がはげしくなり、竣工を瀬戸内海で行うことになったが、不運にも横須賀出港17時間後、潮岬70海里のところで敵の潜水艦により沈められた。その「信濃」も護衛し、救助もしました。

⑥地獄絵のようだった残酷な引上げ救助

何度も救助の経験をしています、大半は多くても80名。この時は全艦隊で3,700名が戦死しました。敵機が引き上げたあと、はぐれた飛行機2機が泳いでいる人を機銃掃射して、こういう行為に腹が立ちました。普通そこまでやらない。



駆逐艦「雪風」 基準排水量 2000 トン、
速力 35 ノット、乗員 239 名

救助は風上からスクリューを止めて行います。風に流されて近づいてロープをおろして救助する。「大和」の時は重油がすごかった。所々に火がついて燃えている。空には対空砲の煙が残っている。海の中の兵士は目と歯だけ白く見えている。「早く！」とさけんでいて地獄絵のようでした。艦長命令で「弱っているやつは後回しで元気なやつから助ける」と言われました。また沖縄で突撃するのかなと話しました。ロープは油ですべる。船腹

も油でベタベタ。時間がかかって残酷な引上げでした。2時間かかりました。

やっと助け上げて、そこで氣力がなくなって気を失うと死んでしまいます。往復ビンタで気付かず。裸にして蒸気で油をおとして、下着と毛布をわたして船室に入れました。重油を飲んでいるのは吐かせました。必死だったので馬鹿力が出ました。足の傷の痛さも忘れてやっていました。しかし助ける前に沈んでしまう人もいました。どうして助けられなかったかという罪悪感がある。すべりおちて「お母さん」と言って死んでいった。少年兵でした。片腕の兵士がつかまっているのを、下に下士官がその両足につかまっていた。どうしても引き上げられないので、カギ棒で下士官の腕をたたいて落しました。良心にさいなまれながら引上げを続けていると、目前でうつ伏せのまま静かに沈んでいく太った下士官のパンパンに膨れ上がった背中白いシャツが、なぜか私に対する怨念のまなざしのように見え、いまだに脳裏から離れない。

「雪風」は400名位を乗せて内地に帰りました。駆逐艦「磯風」が火災をおこし、横づけにして戸板を渡して300名を乗せ、全部で400名位でした。私は収容者の世話係をして寝ずの番で、翌朝、前甲板に出ると鹿児島南端をひた走っていて、その時の感想は雀躍の思いというか何とも言えない爽快さ、それと母との約束を果たしたというのが本音でした。

⑦戦後の「雪風」は復員船で13,600人引揚げ

終戦は、天の橋立の宮津湾で迎えました。水雷長から「若いから残れ。軍の機密を焼却しろ。」と言われて、海軍の機密書類一切を軍命のもと焼却した。うらみごとを聞いているようでした。

戦後は復員船になり、900名収容できて船足も速い。汕頭（スワトウ、中国広東省の港湾都市）では、陸軍の兵隊200人引揚げの時、食料を援助してもらいました。その中国軍の司令官がその隊長と陸軍士官学校の同級生で一発もうたず、平和に終戦を迎えたそうです。ニューギニアのポートモレスビーでは台湾の高砂族の青年がその兵隊でした。その隊長が来てあいさつして「日本の国体は大丈夫ですか」「天皇陛下はご健在ですか」と言って、これには感心しました。引揚げも後回しで最後になっていたのに、日本の食料事情が悪いのをラジオで聞いて知っていて、隠しておいた食料を出してくれました。そういう厚意を受けたことは後々語り継いでもらいたいと思います。水木しげるさんも乗って絵のうまい人がいると聞きました。全部で13,600人をのせました。ベトナム、沖縄にも行きました。軍人、軍属、一般邦人を合わせ全部で約500万余の人が海外から引き揚げてきた。まさに民族の大移動であった。

そのあと賠償船として「雪風」を、蒋介石の中華民国に上海で引き渡しました。船内をピカピカにみがいてわたしました。

⑧復員、帰郷、母との再会——体験の語り継ぎを

2年後に浦賀で復員しました。夜汽車に乗ったら、いきなり一般の人から「オマエたちのせいで、オレたちはどれだけ苦労させられたか。特攻くずれが今頃帰ってきて何をするのか」と言われました。手のひらを返したようでした。

翌朝、田舎に帰って「ただいま」と言ったら母親が出てきて「信夫か?」と言って、すぐわからなかったが、涙をためて体をさすってくれて「よく生きて帰ってきた」と。「おかあさん、負けてこのザマだ」と言ったら「生きて帰ったのだから、それだけお国のためにご奉公したことだから、何も世間様に恥じることはない」の一言に命の尊さを知らされました。

次の正月で90才になりますが、何とか自分の体験だけは一人でも多くの方に語り継いでいきたいと思い、今、新宿の平和祈念館で小中学生を対象にお話をしています。みなさんも日吉台の地下壕のガイドをやっているらしいと聞きます。お話したことがみなさんの参考になって、また若い人たちに語り継いでいただくことをお願いして終わりたいと思います。

連載

地下壕設備アレコレ【17】

通信・電源設備の新資料を見つけました

運営委員 山田 譲

日吉地下壕の通信機や電源装置については何の記録もなく、わからないことが多いのですが、海軍の別の場所の通信隊の設備・装置の記録文書が見つかりました。日吉の通信室の装備とほぼ共通すると考えられますので、紹介します。その資料は防衛研究所に保管されていた「引渡目録 佐世保海軍通信隊 満場分遣隊」という文書です。分遣隊所在地は長崎県佐世保市黒髪町と北松浦郡相木村と書かれています。現在の烏帽子岳公園あたりと思われます。この文書は戦後、米軍に「通信科兵器」を引き渡すための目録でした。

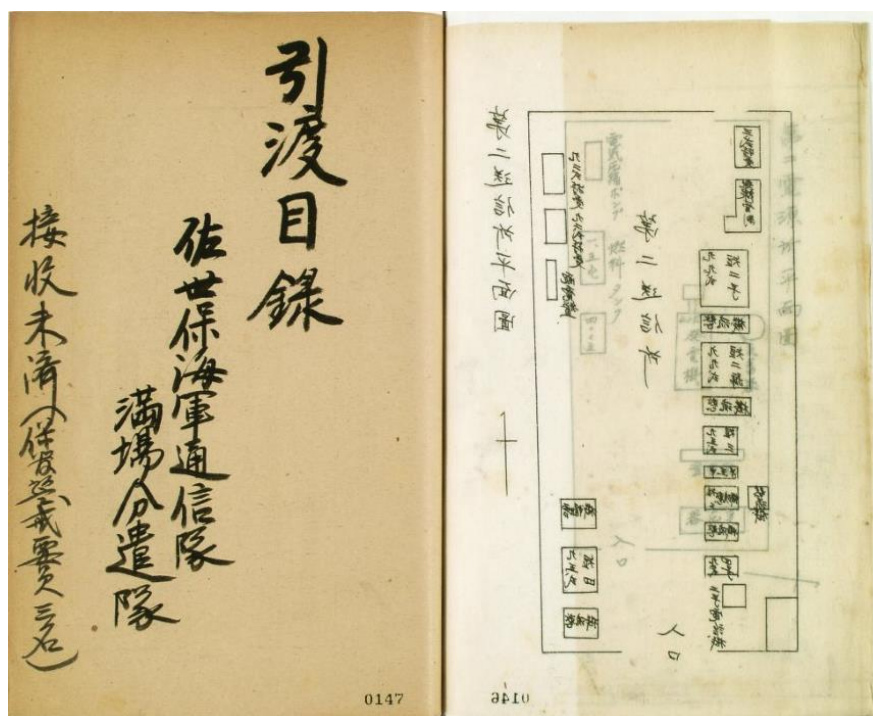
目録に書かれている受信機は、「受信機 27 組」「九七式短受信機改一 2 組」「九二式受信機(陸上用) 一型 1 組」「九二式短受信機一型 1 組」で合計 31 台です。電源設備もくわしく書かれていて「蓄電池大型高压用 220 個 低压用 12 個 小型高压用 156 個 低压用 69 個」「整流器(受信機用) 33 個」「変圧器(受信機用) 30 個」「充電器高压用 13 個 低压用 11 個」「ディーゼル交流発電機 220V40KVA (KW) 1 基」「電動直流発電機 5KW 1.5KW 2 基 蓄電池充電用」「空気圧縮ポンプ 2 HP (馬力) 1 基 発電機起動用」「二号重油 6.5 トン」となっています。

この目録には受信機だけでなく、送信機や方位測定器、電話機、発電機や蓄電池から重油、消火器まで分遣隊のすべての装備品が書かれています。おそらく、これが海軍通信隊各隊の標準的な装備・機器の種類と数量なのだと思います。

ただし、ここも日吉同様、受信専門だったようで送信機は 1 台だけです。かわりに「零式二号多重電信管制装置 送信監視装置 C 1 組」と書かれており、別の場所にある送信設備(おそらく佐世保市針尾送信所)を遠隔操作するようになっていたようです。日吉から船橋送信所などに管制線を引いて送信したのと同じなのではないかと思っています。

また地下壕を掘って「耐弾電信室」2 室と「電源所」1 室を造っていて、その室内設備の配置図もついていました。ただし「工事中」とされていて未完成だったようです。その「第一受信室」には、部屋の両側に「九二式特受信機改三、四」が 15 台。これに「タンガー式充電機」6 台と「電池棚」を設備。「第二受信室」には受信機が 12 台、「タンガー式充電機」3 台と電池棚を設備。「電源所」には「発電機、変圧器、配電盤」と「水槽」があり、「九五式短四号送信機」1 台と付属「整流器」1 台、「二号無線電話機」1 台と付属「整流器」1 台も設置されていました。

ここに書かれている「水槽」については、『軍艦メカ開発物語』(元海軍技術中佐・深田正雄著 光人社NF文庫)に「非常用のディーゼル発電機…には冷却水がいる。冷却槽は… 3×6×1.5メートルはあったろうか。」と書かれています。日吉でも発電機のそばには必ず水槽があり、戦後、米軍がつくらせた測量図面には「silencer」と書かれています。それで私たちはこれを「消音器室」と考えてきました。しかし深田氏の記述によれば、これはむしろ



佐世保海軍通信隊満場分遣隊引渡目録の表紙(防衛研究所戦史室所蔵)

「冷却水槽」だったようです。もちろん消音機能も兼ねていたと言ってよいと思います。満場分遣隊の資料には「水槽」と書かれているだけですが、発電機には必ず冷却水槽が必要だったようです。

ところで、資料に出てくる「タンガー式充電機」とは何なのか？ということが、次の問題です。これは交流電気を直流電気に変える整流器です。それでこれを調べていたら、当時の蓄電池（バッテリー）のこともだいぶ、わかりました。これについては、次回に書こうと思います。

【前回の補足——海軍第5分室は大倉山気象部、第7分室は日吉の水路部、第11分室は日吉の連合艦隊司令部と前回書きましたが、さらに第13分室は日吉の航空本部地下壕でした。】

第11期日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 ～戦争遺跡を歩いて平和の語り部になろう～

毎年 2000 名余りの見学者が訪れる戦争の遺跡・日吉台地下壕のボランティアガイド養成の実践講座です。戦争遺跡を保存するだけでなく、二度と悲惨な戦争をくりかえさないために活用していくにはガイド活動が不可欠です。物言わぬ遺跡にガイドの案内を加えて歴史を語ってもらいます。この活動をいっしょにやってみませんか？

第1回 1月14日(土) 慶応大学日吉キャンパス 来往舎中会議室 13時～15時半
《ガイド活動の概要》日吉台地下壕保存の会の活動について 修了者の体験・感想
☆ 地下壕見学会（保存の会が毎月行っている定例見学会に実習として参加していただきます。）1月28日(土) 日吉駅集合 13時～15時半

第2回 3月4日(土) 来往舎中会議室 13時～15時半
《戦争体験を聞く》 川崎市中原空襲の体験、その他
☆ 地下壕見学会 2月25日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時～15時半
※※公開講演会 4月8日(土) 来往舎シンポジウムスペース 13時～
講師：都倉 武之氏（慶應義塾大学福澤研究センター准教授）※※

第3回 4月15日(土) 来往舎前集合 10時～12時・昼食後 13時～15時半
《フィールドワーク》 日吉地区の戦争遺跡などの見学
☆ 地下壕見学会 3月25日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時～15時半
☆ 地下壕見学会 4月22日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時～15時半

第4回 5月20日(土) 来往舎大会議室 13時～15時半
《ガイド活動の実際》ガイドポイントの説明、フリーディスカッション・修了証授与
定員 30名（高校生以上）参加費 2000円（全4回分）

申込先 ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号をご記入の上、
下記「ガイド養成講座」係へお申し込みください。 ㍻切 1月8日(日)

横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方 「ガイド養成講座係」

TEL&FAX 045-562-0443（午前・夜間）

主催 日吉台地下壕保存の会

後援 港北区役所 ☆この企画は地域のチカラ応援事業の助成を受けています。

チョットひと休み

「最近見た珍百景・その2」

副会長 長谷川崇

◇横浜駅のEV（エレベーター）前にママ友が5人、デラックスベビーカーで待っていた。その後ろに老人が二名。いよいよドアが開き乗り込んでまだ多少の猶予があるのに、老人が乗らずにドアを閉め、貸し切り状態で上がった。恐ろしいママ友軍団を見て不愉快だった。

◇ママチャリが前後に子供を乗せて歩道を素早く後ろから通り過ぎ、もう少しでぶっつけられそうになった。まだまだ交通のルールが変わっていないと。

普段此の風景が現在の日本ですね。しかしながら、帰りに電車で席を譲ってくれた人がいて大変有難く思った一日だった。

訃報

長谷川崇さんが9月、お亡くなりになりました。副会長として会のご指導に当たられる一方、見学会ガイド、戦争展、聞き取り、パネル展示会・講演会などにも幅広く精力的に活動されていました。若者たちからは「アニキ」と親しみをもって呼ばれていたように、頼りがいのある心優しいお人柄でした。心よりの感謝とご冥福をお祈りいたします。

10月3日 地下壕見学会
川崎市立西梶ヶ谷小学校 6年生



活動の記録 2016年9月～12月

- 9/14(水) 定例見学会 63名
 9/24(土) 定例見学会 62名 会報127号発送(来往舎205号室)
 9/28(水) 慶應高校生徒会 18名
 9/30(金) 地下壕見学会 防衛大学校 22名
 10/3(月) 地下壕見学会 川崎市立西梶ヶ谷小学校 6年生 78名
 10/5(水) 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会(法政第二高校教育研究所)
 10/6(木) 運営委員会(来往舎205号室)
 10/12(水) 定例見学会 53名
 10/21(金) 平和のための戦争展川崎・横浜 開催準備(川崎市平和館)
 10/22(土)～23(日) 平和のための戦争展川崎・横浜(川崎市平和館)
 展示・若手教育者の発表・シンポジウム「次世代に伝えよう 地域の戦争遺跡」
 10/22(土) 定例見学会 45名
 10/28(金) 地下壕見学会 慶應大学1年(人文科学特論 長谷川先生) 13名
 11/3(木) ガイド学習会(菊名フラット)
 11/5(土) 日吉フェスタ(日吉キャンパス) 展示・書籍販売・キャンパス地上ツアー2回
 地域のチカラ推進事業中間発表会 展示(港北区役所)
 11/9(水) 定例見学会 51名
 11/15(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 11/26(土) 定例見学会 60名
 11/27(日) 八王子の戦跡と浅川地下壕をめぐるバスツアー 参加者20名
 11/30(水) 慶應高校生徒会 15名
 12/13(火) 運営委員会<予定>(来往舎205号室)
 12/14(水) 会報128号発送<予定>(来往舎205号室)



11月27日、八王子戦跡バスツアー湯の花トンネル手前のバス停で写した、カエデとクサギの実

★定例見学会について日吉台地下壕の定例見学会は毎月2回実施しています。毎月第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13～15時30分

★地下壕見学会は予約申し込みが必要です。お問い合わせは見学会窓口まで
 Tel・Fax 045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 Tel 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町 2-1-33 Tel 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
 代表 阿久沢 武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
 日吉台地下壕保存の会運営委員会